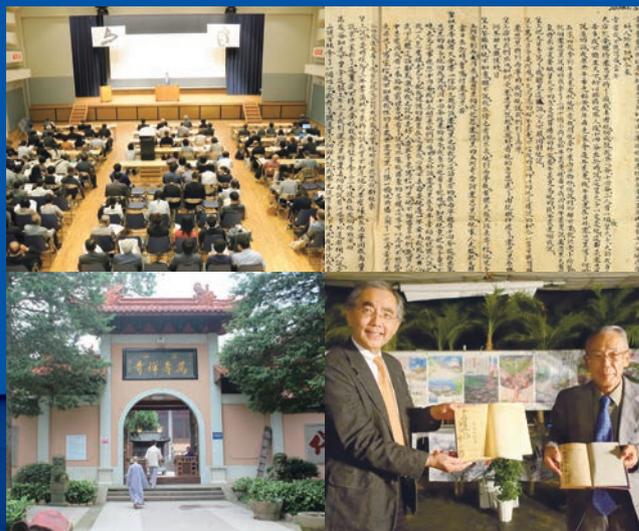


関西大学文化交渉学

ICIS NEWS LETTER

ニューズレター



CONTENTS

- ICIS三研究班の紹介
- ICIS三研究班の研究活動
- ICIS国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティブ」
- 東アジア文化交渉学会第7回国際シンポジウム開催
- 研究員の活動報告

発刊の辞

——文化交渉学の発展に向けて

「関西大学文化交渉学ニューズレター」創刊号をお届けします。このニューズレターは本学が展開してきた「文化交渉学」の活動や成果を内外に発信するものです。

そもそも「文化交渉学」の発端は2007年度、本学が申請した「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」プログラムが文部科学省グローバルCOEに採択され、「文化交渉学教育研究拠点」(Institute for Cultural Interaction Studies, 略称ICIS)を設けたことに始まります。

このグローバルCOEは5年間にわたって教育・研究の双方における高度なプログラムを推進し、終了後、最高ランクの評価を与えられたことは周知のとおりです。いわば日本における国際的高等教育・研究のトップランナーとして役割を發揮してきたのです。

その教育面についていえば、2008年度、本学の大学院文学研究科内に文化交渉学専攻を開き、続いて2011年度、これを新たな大学院「東アジア文化研究科」に発展させました。2012年度にはそのすぐれた業績が認められて文部科学省「卓越した大学院拠点形成支援補助金」の採択対象となり、私立大学としては早稲田大学と並んで最高

ICIS 拠点リーダー 文学部教授
吾妻 重二



のS評価を受けています。

研究面についていえば、グローバルCOEのメンバーが精力的に研究を重ね、数多くの著書・論文を発表してきたことはいうまでもありませんが、「東アジア文化交渉学会」(Society for Cultural Interaction in East Asia, 略称SCIEA)を設立したことも特筆されます。これはグローバル的視野をもつ創造的な研究活動を目指して作った国際学会で、国内外の多くの会員の参画のもと、2009年本学において第1回大会を開催し、今年までに7回の国際大会を重ねています。

さて、現在の「文化交渉学研究拠点」(ICIS)は、こうしたグローバルCOEの研究面における活動を継続的に発展させるため2012年度、本学東西学術研究所内に設置されたもので、3つの研究班が多種多様な学術活動をくり広げています。

本ニューズレターはこのような「文化交渉学」研究をめぐるさまざまな情報を掲載し、ダイナミックな文化史研究の発信媒体として今後、充実をはかっていく所存です。一層のご支援を心よりお願いいたします。

ICIS三研究班の紹介

言語接触研究班

ものごとの本質は、その中心よりもむしろ周縁からこそ見えてくることがある。学問研究においても同様で、たとえば、大航海時代以降、布教、貿易等に伴う人的物的交流により中国語を学習、或いは考察の対象とする異邦人が現れ、彼らの手によって夥しい数の文献が蓄積された。こうした「域外＝欧米、日本、朝鮮、琉球等」の目を通して観察された中国語に関する研究は、中国人のものよりも現象を複眼的に捉え、16～19世紀の中国語の真の「面目」を反映している場合もあると考えられる。そして、このことは、中国語研究だけに特



内田 慶市

有のものではなく、他の言語研究においても同様で、周縁からのアプローチの有効性は何ら変わるものではない。

一方、現在、世界的規模で進む文献のアーカイブス化は学問の無限の可能性を秘めているが、それだけでは展望が開けないことも事実である。そこには新しい方法論の確立が不可欠となる。特に、1) 世界をリードする文化交渉学研究の方法(＝「周縁アプローチ」)を基盤とした新しい個別言語学(特に、中国語学、国語学)の確立を目指し、2) 個別言語の研究(特に近代を中心として)を研究しながら、3) 近代における各言語研究に関わる周縁文献を中心とするアーカイブスを構築し、このことにより、中国語学および国語学研究を既存の研究とは質の異なる高みに導くことが求められることになる。

- 主 幹 内田 慶市 外国語学部・教授
- 研究員 乾 善彦 文学部・教授
- 奥村佳代子 外国語学部・教授
- 沈 国威 外国語学部・教授
- 委嘱研究員 木津 祐子 京都大学・文学研究科教授
- 陳 力衛 成城大学・経済学部教授
- 客員研究員 松田 清 京都大学・名誉教授

- 非常勤研究員 阿部慎太郎
- 伊伏 啓子
- 稲垣 智恵
- 王 暁雨
- 田中巳榮子
- 氷野 歩

近世近代日中文化交渉 (日中移動伝播) 研究班

近世から近代にかけての東アジア地域では、人とそれに媒介されるモノや情報の移動・伝播が加速度的に拡大する。当研究班は、そのうち日本と中国の間における現象にひとまず対象を限定し、どのようなモノや情報が、どのような人の手によって、どのようなプロセスを経て伝播したのか、さらに、伝播したモノや情報がいかなる文化的影響を引き起こしたのかに注目して、



井上 克人

近世近代の日中文化交渉の一側面を切り取るとともに、文化事象相互の比較研究を行う。もとより対象となりうる事象が膨大かつ広汎であることは言を俟たないが、当研究班では、各研究員の専門分野に立脚しながら、近世近代における東アジア圏の文化交渉の俯瞰図の一部を構築することをめざしている。具体的には、「東アジアにおける明治思想の位相」、「近代日中交渉史における薩州人及び京都支那学派」、「近世近代の日中間における美術交渉史の諸相」、「日本と中国における近代学術としての歴史学形成をめぐる諸問題」、「近世近代の日中交渉のバックグラウンドとしての海域ネットワーク」などが挙げられる。

- 主 幹 井上 克人 文学部・教授
- 研究員 陶 徳民 文学部・教授
- 中谷 伸生 文学部・教授
- 藤田 高夫 文学部・教授
- 松浦 章 文学部・特別契約教授

- 非常勤研究員 高橋 沙希
- 日並 彩乃
- 宮嶋 純子
- 準研究員 辜 承 堯
- 呂 超

東アジア宗教儀礼研究班

東アジア宗教儀礼班では、仏教・儒教・道教の儀礼と社会秩序の関係について総合的に研究を進めていく。儀礼の内容はもとより、背後にある思想、諸地域における歴史的な展開について考察を行っていくことを目的とする。

東アジア社会においては様々な宗教儀礼によって社会の安泰が祈られ、儀礼の執行によって社会秩序が可視化された。



原田 正俊

天変地異といった自然の脅威に対する祈り、疫病をはじめ病平癒に対する祈りなどは、日常的に営まれてきた。

また、現世のみならず、人々の死後の安寧を祈る祭祀も様々な形式で執り行われた。こうした宗教儀礼は国家や村落をはじめとした共同体の安定的な運営、存続に寄与し、支配秩序の形成にも役だった。本研究班では、日本史・中国思想史・美術史などの研究者が共同して、仏教・儒教・道教儀礼の歴史的展開を比較検討、総合化して、儀礼が持つ歴史的・思想的な意味を明確にしていきたい。

■ 主 幹 原田 正俊 文学部・教授／拠点サブリーダー

■ 研 究 員 吾妻 重二 文学部・教授／拠点リーダー

二階堂善弘 文学部・教授

西本 昌弘 文学部・教授

長谷 洋一 文学部・教授

■ 委嘱 研究員 三浦 國雄

中国四川大学・文化科技協同創新研究中心学部教授

■ 非常勤 研究員 李 曉辰

佐藤 トウイ ウェン

中田 美絵

藤原 崇人

山田 明広

■ 準 研究員 榎木 亨

姚 晶晶

佐藤健太郎

鈴木 章伯

二ノ宮 聡

前原あやの

横山俊一郎

橘 悠太

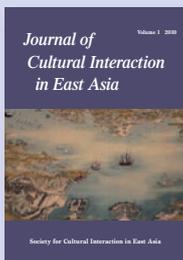
東アジア文化交渉学会第8回年次大会開催のご案内

東アジア文化交渉学会第8回年次大会・国際シンポジウムが、下記のとおり開催されます。

テーマ 「東アジア文化交渉学の新しい歩み」

日時 2016年5月7日（土）・8日（日）（予定）

会場 関西大学100周年記念会館



Journal of Cultural in East Asia vol.1



関西大学100周年記念会館



中国复旦大学
2014.5.8

第6回東アジア文化交渉学会

ICIS三研究班の研究活動

言語接触研究班

ICIS 後継班としての言語接触研究班では、平成25年から現在までに合計12回の研究例会を開催してきた。とりわけ、平成25年度は、「～研究の最前線」と銘打ってほぼ隔月1回の割合で、文化交渉と言語接触に関わる研究を様々な角度から追求してきた。たとえば、「近代官話教科書研究の最前線」では、近代日本の最初の北京語教科書である『亜細亜言語集』の言語的特徴、日本人の手になる最も典型的な中国語教科書である『官話指南』の各種版本と、その中国での普及と言語的特徴に関する報告が行われた。「唐話・琉球官話研究の最前線」においては、唐話及び琉球官話といういわゆる「周縁資料」による官話研究の実際に加えて、さらにはこれまで語学の資料としてはほとんど扱われてこなかった朝鮮国漂着船の筆談記録の諸相について歴史

学の立場からの報告も行われている。これはまさに、文化交渉学の基本コンセプトである「脱領域」を具現化した研究活動とすることができる。また、新しく発見された資料に基づく漢訳聖書研究や琉球官話研究、また、これまでの語彙史研究に一つの新しい枠組みを与える「概念史」と結びつけた研究も行われている。

この他、本研究班は、積極的に研究員以外のゲストスピーカーを招いて学術交流を行っていることも特徴であり、たとえば、平成26年度には2日間にわたって国内外の研究者9名による研究例会も開催されている。

また、他の学会および東西学術研究所の他の研究班との合同例会も行っており、最も直近の研究例会は中国近世語学会と非典籍出土資料研究班とのコラボレーションとして実現した。

2013. 4. 27 (土) 近代官話教科書研究の最前線

- 斉 燦 『亜細亜言語集』疑問文及び語気詞の研究
 氷野 善寛 『官話指南』の版本について
 内田 慶市 『改良民國官話指南』の積義について

2013. 5. 24 (金) 日中語彙交流史研究の最前線

- 孫 建軍 近代新語「教科書」の成立と伝播
 鄭 艶 『ナポレオン刑法典』の訳書から見た近代法律用語の交流
 沈 国威 近代語の語源探索：
 概念史をバックグラウンドに「伝統」を例として

2013. 6. 29 (土) 唐話・琉球官話研究の最前線

- 松浦 章 朝鮮国漂着中国船の筆談記録にみる諸相
 奥村佳代子 『唐韻三字話』の語彙
 一他資料の「三字話」との比較
 内田 慶市 琉球官話の新しい資料
 一長澤文庫蔵『中国語例文集』について
 木津 祐子 琉球「通事書」再考
 一『廣應官話』を軸に

2013.10.25 (金) 鄭其照研究の最前線

- 内田 慶市 中国人による英華辞書の系譜
 Sam Wong 鄭其照の生涯
 宮田 和子 鄭其照『字典集成』の訳語：継承と発展
 沈 国威 『申報』1872～1900年における鄭其照

2013.11.22 (金) 漢訳聖書研究の最前線

- 朱 鳳 漢訳聖書における音訳語について
 塩山 正純 漢訳聖書からみる西洋人宣教師の中国語
 内田 慶市 サント・ペテルブルグ蔵満漢版『古新聖経』

2014. 1. 31 (金) 言語接触研究の最前線

- 講演
 松田 清 佐久間象山の辞典開版事業とモリソン英華辞典
 一吉雄権之助編蘭英漢対訳辞書を中心に一
 田中巳榮子 近世初期俳諧の難読漢字と節用集の関係を中心に
 乾 善彦 古代語における日中言語接触の実相

2014. 2. 18 (火) ゲストスピーカーによる講演

- Federica Casalin 漢訳洋書におけるイタリアのイメージについて

2014. 6. 14 (土) 古今語彙研究の最前線

- 橋本 行洋 諸橋『大漢和辞典』所収の近現代中国語とその依拠資料
 一石山福治の中日辞典、およびその典拠となった華英辞典について一
 岡島 昭浩 『語録字義』の改変本『語録箋解』(貞享三年)から
 荒川 清秀 中国語における書きことばの位置
 一街角の中国語から見えてくるもの一

2015. 1. 24 (土) 近代語彙・概念史研究の最前線

- 方 維 規 ドイツ概念史研究の歩み 一その理論と実践からの示唆一
 松田 清 吉雄権之助編蘭英漢対訳辞典における宗教・本草博物関係語彙
 孫 建軍 從『致富新書』到『致富新論譯解』
 一明治初期漢譯西書的翻刻與翻譯
 陳 力衛 各領風騷數百年 一“文学”与“教育”的交替
 沈 国威 『積極』と『消極』：物理学用語から人文科学用語へ

2015. 1. 25 (日) 周縁資料による近代漢語研究の最前線

- 塩山 正純 エドキンスが教科書に記した官話
 奥村佳代子 朝鮮問答記録の中国語資料的価値について
 一『備邊司謄録』「問情別單」の「問」の言葉一
 木津 祐子 長崎の外から見る唐通事資料：
 本文の外から見る周辺資料
 内田 慶市 カサナテンセ図書館の幾つかの資料

2015. 3. 6 (金) 漢語・漢字文献と言語接触

- 田中巳榮子 近世初期俳諧の漢語の側面
 乾 善彦 『小野篁歌字尽』とその周辺
 沈 国威 漢字の意味とその獲得：日中比較対照の試み

2015. 6. 6 (土) 中国近世語学会2015年度研究総会

- 王 正 慧琳『一切経音義』における『玉篇』の引用について
 石 彦 霞 近代汉语话语标记“对了”的生成机制与功能探析
 奥村佳代子 近世日本人による白話文
 一創作白話文の題材と語彙語法
 玄 幸子 太田辰夫「兼語動詞」と認知言語学
 ■ 講演
 蔣 紹 愚 关于汉语古今差异的一些思考

近世近代日中文化交渉（日中移動伝播）研究班

本研究班は、「近世近代における日中間の人物移動と情報伝播」を共同研究テーマとして掲げ、3年間の共同研究プロジェクトを遂行している。本研究班の目的は、近世から近代にかけて加速度的に拡大した東アジア地域における人およびそれに媒介されるモノや情報の移動・伝播のうち、日本と中国の間における現象に焦点をあてて、伝播のプロセス、その文化的影響を解明し、近世近代の日中交渉の側面を切り取るとともに、文化事象相互の比較研究を行うことにある。もとより対象となる事象は膨大かつ広汎であるが、本研究班では各メンバーの専門分野からの事例収集をもとにしながら、日中という視野から、近世近代における東アジア文化交渉の俯瞰図の一部を構築することをめざしている。

平成25年度に発足してより、今年度前半までに6回の研究例会を開催し、12本の研究報告を行った。その過半数が海外からのスピーカーであることが本研究班の特色でもある。そのうち、本年6月26日に開催された研究例会では、松浦章研究員および李慶新広東省社会科学院孫中山与歴史研究所所長による二つの研究報告がなされた。

2013.6.21 (土)

劉 金才 近世における中日商人倫理思想の相違
—儒家倫理への受容と止揚を中心に

崔 濤 内観禅修与日常生活

2013.7.5 (金)

松浦 章 吉田初三郎と東アジアの汽船航路案内
孔 穎 晚清中央政府の法制官董康の日本監獄視察について

2014.7.18 (金)

山中 浩之 新出「尾崎雅嘉自筆稿本『舶来書目』」について
陶 徳民 日記・手紙で甦る個人と時代
—アーネスト・サトウ研究ブームに思うこと—

松浦章研究員の報告「1930年代日本郵船会社の上海航路案内」は、1930年・33年・36年に日本郵船会社が発行した3種の「上海航路案内」を素材に、同航路に就航した客船とその運行スケジュールを詳細に調査したものであった。今回の報告は、松浦氏が精力的に探求してきた近代東アジア海域交流史の一端をなすもので、「航路案内」という資料の利用がきわめて新鮮であった。また当該時期の上海に出入した汽船を総トン数で比較した場合、この時期に日本船籍が中国船籍を凌駕すること、同時に出入した汽船の総トン数全体は減少することなど、興味深い問題も提示された。

李慶新氏の報告「広東から嘉定へ：中国・ベトナムの海上“書籍の路”」は、近年東アジアにおける文化交渉研究で注目を集め始めたベトナムでの漢籍流通に関する重要な新知見を提出するものであった。ベトナムでの販売・流通を念頭に置いて、広州・仏山で印刷された書籍が、ベトナム・嘉定の書肆にもたらされ、そこに中越両国の華人商人のネットワークが介在するという指摘は、東アジアにおける文化情報の発信と受容に関わる新たな注目すべき視点の提示であり、いわゆる「ブックロード」の実態を考える上でも、今後必須の視点となるものであろう。

2014.10.17 (金)

馬 学新 最近20年来長江デルタ地域の経済成長と国際協力
明 旭 中国における儒商研究の現状

2015.5.15 (金)

呂 超 宮崎市定における近隣地域史像の変遷
—東洋史からアジア史へ—
徐 静波 近代日本の文化と上海（1923-1946）
—堀田善衛を中心に—

2015.6.26 (金)

アジアの海域をめぐる文化交渉
松浦 章 1930年代日本郵船会社の上海航路案内
李 慶新 从广东到嘉定：中越交流的海上“书籍之路”
（広東から嘉定へ：中国・ベトナムの海上「書籍の路」）

東アジア宗教儀礼研究班

本研究班では、仏教・儒教・道教の儀礼や信仰が東アジア社会においてどのように展開していったのかについて研究を進めている。例会をもとに成果の概要を紹介していきたい。

中国仏教史研究からは、唐代の五臺山文珠信仰が東部ユーラシア地域にどういった形で受容され、後唐の支配体制の正統化につながるのかといった研究が発表された。また、インドから伝来し、釈迦の生前の姿を写したとされる梅檀瑞像が北宋から元時代にどう位置付けられていたのかが検討された。五臺山信仰や梅檀瑞像信仰は、日本へも影響は大きく、その前段階の様相、地域差の問題、伝播の在り方としても注目される。

日本史研究からは、空海がもたらした仁王会が如何なる起源

を持ち、平安時代の日本社会で受容されていくかが報告された。また、15世紀に、日本の社会で急速に広がった臨濟宗夢窓派を採り上げ、中国からの伝法が、新たな系譜の強調や袈裟・頂相など物の伝授によって形成されていくことが明らかにされた。

また、東アジアにおいて儒教儀礼のテキストとして重要な『家礼』が中国社会でどのように変化していくのかが検討され、様々な社会関係を取り込んだテキストへの変容が明らかにされた。さらに『家礼』が近世の日本社会で受容され、実際の儀礼にまで大きな影響を与えていく経過が報告された。

道教関係の研究では、日本で受容された道教の神像が明らかにされ、日本にのこる古い形態の道教神像の紹介も注目される。また、中国から将来された神像が日本の天台宗に採り入れられ、新たな造形物として伝来したことも紹介された。

2013.6.21 (金)

劉 金才 近世における中日商人倫理思想の相違
—儒家倫理への受容と止揚を中心に

崔 濤 内観禅修与日常生活

2013.7.29 (月)

仏像・絵画の伝播と変容
藤原 崇人 梅檀瑞像の遷転と10～14世紀東部ユーラシアの王権
原田 正俊 室町時代における夢窓派の伝法観と袈裟・頂相
長谷 洋一 島根・清水寺摩多羅神像について
経典と法会

西本 昌弘 唐代貞元年間の訳経事業と空海は一切経書写

上川 通夫 藤原道長金峰山経塚の成立背景

山田 明広 現代台湾の鬼月における無縁仏教済儀礼について
—道教の中元普度法会と仏教の盂蘭盆会の比較—

王権と仏教

佐藤健太郎 『続日本後紀』掲載僧伝について
中田 美絵 沙陀政権と仏教—後唐建国までを中心に—
中井 裕子 後醍醐天皇による勅願寺認定について

2014.9.5 (金)

三浦 國雄 『朱子家礼』の変容—『応酬彙選』を読む—
吾妻 重二 水戸藩の儒教喪祭儀礼文献について
黄檗宗宝林寺の二十四諸天
二階堂善弘 中国東北地域における廟会の現状
二ノ宮 聡 一大石橋娘娘廟会を例に—
前原あやの 星座分類中の三家分類の位置づけ

ICIS 国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティヴ」

7月18日(土)と19日(日)の2日間にわたってICIS 国際シンポジウム「文化交渉学のパースペクティヴ」が開かれた。

このシンポジウムは2012年度、東西学術研究所内に設置された「文化交渉学研究拠点」(ICIS, Institute for Cultural Interaction Studies)を構成する3研究班、すなわち「言語接触研究班」、「近世近代日中文化交流(日中移動伝播)研究班」「東アジア宗教儀礼研究班」の合同による開催である。

ICISが文部科学省グローバルCOE「文化交渉学教育研究拠点」の研究部門を継承する組織としてこれまで多くの研究活動をくり広げてきたことはよく知られるとおりであり、これらの研究班がひとまず最終年度を迎えるにあたって、その研究成果と展望を内外に発信したわけである。

プログラムは次のとおりである。

近世近代日中文化交流(日中移動伝播)研究班

7月18日(土) 13:00~16:00

テーマ 東アジア圏における伝統と近代化

発表 ◆王青

(中国社会科学院哲学研究所研究員・中華日本哲学会副会長)

「近代日本と近代中国におけるイブセン主義の受容」

◆高橋文博(就実大学教授)

「主従道徳と近代日本」

◆中谷伸生(研究員・文学部教授)

「木村蒹葭堂の文人趣味と文化交流」

◆藤田高夫(研究員・文学部教授)

「林泰輔の中国上代研究

—伝統漢学から近代中国学への展開」

◆高橋沙希(非常勤研究員)

「明治洋画界における青木繁」

司会 井上克人(主幹・文学部教授)

コメンテータ 陶徳民(研究員・文学部教授)

東アジア宗教儀礼研究班(1)

7月18日(土) 16:20~17:30

テーマ 泊園書院研究

発表 ◆吾妻重二(研究員・文学部教授)

「近代学制のなかの泊園書院」

◆横山俊一郎(非常勤研究員)

「泊園書院の教育と明治・大正期の実業家」

司会 二階堂善弘(研究員・文学部教授)

コメンテータ 中谷伸生(研究員・文学部教授)

言語接触研究班

7月19日(日) 9:30~12:30

テーマ 文化交渉学と言語接触研究

発表 ◆鄒振環(復旦大学歴史系教授)

「マテオ・リッチの世界地図の刊行と伝播」

◆内田慶市(主幹・外国語学部教授)

「周縁資料による中国言語学研究的過去・現在・未来—文化交渉学の視点から」

◆沈国威(研究員・外国語学部教授)

「近代訳語がどう創られたのか」

◆乾善彦(研究員・文学部教授)

「漢文訓読と言語接触」

司会 奥村佳代子(研究員・外国語学部教授)

コメンテータ 陳力衛(委嘱研究員・成城大学教授)

東アジア宗教儀礼研究班(2)

7月19日(日) 13:30~16:30

テーマ 文化交渉と東アジアの宗教・思想

発表 ◆三浦國雄(委嘱研究員・四川大学教授)

「『北斗本命延生経』徐道齡注の諸問題」

◆二階堂善弘(研究員・文学部教授)

「日中寺院における伽藍神の探求」

◆西本昌弘(研究員・文学部教授)

「日中交渉史のなかの杭州水心寺」

◆鈴木章伯(非常勤研究員)

「梁漱溟における社会主義から仏教への転向」

◆佐藤トウイウエン(非常勤研究員)

「ベトナムにおける『家訓』文献」

司会 原田正俊(主幹・文学部教授)

コメンテータ 吾妻重二(研究員・文学部教授)



このように、発表は文学、哲学、思想、言語、歴史、美術、宗教あるいは泊園書院といった個別研究など多種多様な内容にわたり、地域的にも中国や日本、ベトナム、ヨーロッパなどにかかわっていて、一見まとまりがないようであるが、いずれも従来の固定的枠組を踏み越える複眼的視野をもっているところに大きな特徴がある。

文化の相互交渉というものはいつの時代でも、どのような分野でも、またどのような地域・国家間においても起こりうるも

のであり、このような多様な発表がなされたことにこそ、むしろ「文化交渉学」の特色があるといえる。

そのためであろう、多くの聴衆の参加と活発な質疑応答がなされ、今後の展開にも大きな示唆が与えられた。まことに心強い限りである。

本シンポジウムの論文集は来年度、東西学術研究所から刊行の予定である。ご期待いただきたい。

ICIS 拠点リーダー 文学部教授 吾妻重二



王青先生



鄒振環先生



三浦國雄先生



中谷伸生先生



シンポジウム会場



高橋文博先生

東アジア文化交渉学会第7回国際シンポジウム開催

東アジア文化交渉学会の年次総会となる第7回国際シンポジウムが“連携の「東アジア時代」への責任——文化交渉学的アプローチを軸に”をテーマに2015年5月9、10の両日、日本の神奈川県開成町にて開催された。中国本土、香港、台湾、韓国、欧米、それに日本国内から合わせて120人を超える研究者が参加した。

2009年に設立された東アジア文化交渉学会はこれまでに、年次総会となる国際シンポジウムが、大阪（関西大学）、台北（台湾大学）、武漢（華中師範大学）、ソウル（高麗大学）、香港（城市大学）、上海（復旦大学）と、東アジアの大学で開催されてきた。再び日本に戻った今回の大会は、初めて大学以外の会場で開催された。富士山の麓に位置する神奈川県足柄地域には、治水神禹王に関する史蹟が豊富に存在しており、禹に関する伝承、信仰およびその現代社会とのかかわり方に関する研究は、新しい東アジア文化交渉学という学問分野に寄与しうる好事例であり、当地での開催は意義深いものであったと言えるだろう。

「信仰・芸術」という形に具現された禹文化は過去から現代まで地域社会に脈々と継承され、縦横に広がりながら文化交渉が継続するなかで試行錯誤を繰り返し、歴史的文化的に蓄積されてきた。そこには東アジアにおける文化の接触、浸透、衝突、変容、融合という原風景が看取できる。禹そのものが東アジアの共有してきた知の基礎、漢字文化を象徴したシンボルだと捉えられよう。足柄地域のみならず、日本、ないし中国、朝鮮半島の全域に分布している禹文化の背景には、人的、物的に知の循環が歴史を貫き、動いている。これを動態的に読み取り、把握し、人文学、社会学など多分野の多様な方法を総合して複眼的な見地から解明することによって、文化交渉のあり方がよりリアルに、身近に浮かんでくる。こうした禹研究の取り組みをも取り込むことで、東アジア文化交渉学を生産的に発展させるだけでなく、地域・民間と協力しあう研究の模索も視野に入ってくる。学会としては学問の方向性と、成果の社会貢献を問いかけてつ、研究活動の継続発展をいっそう推し進めようとする所存である。

大会の冒頭、前文化庁長官の近藤誠一先生、ドイツ・ボン大学のW・クビン教授がそれぞれ「日本文化と東アジア文化～東アジア文化交渉学への期待」「翻訳と現代性——『老子』のドイツ語訳と近代ドイツ語文学」という演題で基調講演を行い、続いて、地元のNPO団体「足柄の歴史再発見クラブ」顧問の大脇良夫さんが「文命（禹王）が果たす日中台韓の文化交流」という題目で、酒匂川治水の歴史と川沿いの文命にちなんだ遺跡等について報告した。

大会では、次の8つの分科会テーマが設定された。

1. 東アジアの新しい文化史：書籍と人物
2. 東アジアにおける近代社会と民間信仰
3. 治水神禹王研究と地域間文化交流
4. 文化交渉学視点の東アジア知識史研究の諸問題
5. 東アジアにおける近代学術システムの構築
6. 東アジアにおける近代史観の形成と展開
7. 東アジア近代知識史と新文化史の研究
8. その他東アジア文化交渉学と関連のあるテーマ

参加者は、中国の治水神・禹王に関する研究を始め、東アジア地域全般の文化交渉に関わる研究成果を発表し、活発な議論が展開された。

大会には研究者だけではなく、町民ら約170人も駆けつけ、研究成果に耳を傾けた。

最終日の10日夜には、開成町は、同町の「あじさいの里」内にある農園で歓迎レセプションが催され、阿波踊り、中国の芸能「変臉」を鑑賞しながら地元農産物を使った手料理のもてなしを受けた。各国の研究者をはじめ、参加者は大満足であった。

学会の総会では新会長に王敏法政大学教授が選出され、また2016年度の東アジア文化交渉学会第8回年次大会と国際シンポジウムは、「東アジア文化交渉学の新しい歩み」をテーマに関西大学にて開催されることが決定された。

外国語学部教授 沈 国威



研究員の活動報告

7 図書の出版

■ 関西大学東西学術研究所研究叢刊

近世東アジア海域の 帆船と文化交渉

松浦 章 著

2013年10月30日発行

477ページ



近代東アジア海域の人と船 —経済交流と文化交渉—

松浦 章 著

2014年12月1日発行

413ページ



日本古代中世の 仏教と東アジア

原田 正俊 編著

2014年3月31日

345ページ



〈時〉と〈鏡〉超越的覆蔵性の哲学 —道元・西田・大拙・ハイデガー—

の思索をめぐって—

井上 克人 著

2015年3月20日発行

460ページ



■ 関西大学東西学術研究所資料集刊

家礼文献集成 日本篇 2

吾妻 重二 編著

2013年3月31日発行

301ページ



大正癸丑蘭亭会への懐古と継承

—関西大学図書館内藤文庫

所蔵品を中心に—

陶 徳民 編著

2013年3月31日

284ページ



家礼文献集成 日本篇 3

吾妻 重二 編著

2015年3月20日発行

341ページ



関西大学長澤文庫蔵

琉球官話課本集

内田 慶市 編著

2015年3月20日発行

364ページ

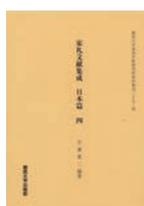


家礼文献集成 日本篇 4

吾妻 重二 編著

2015年3月30日発行

283ページ



耳鳥齋アーカイヴズ

江戸時代における大坂の戯画

中谷 伸生 著

2015年3月31日発行

209ページ



泊園文庫印譜集

—泊園書院資料集成 2—

吾妻 重二 編著

2013年3月30日発行

188ページ



重野安繹における外交・漢文と国史

—大阪大学懐徳堂文庫

西村天囚旧蔵写本三種

陶 徳民 編著

2015年3月31日発行

234ページ



漢訳イソップ集

内田 慶市 編著
2014年2月28日発行
607ページ



自筆稿本目録稿 (丙部)

吾妻 重二 編
2013年3月30日発行
34ページ



環流する東アジアの
近代新語訳語

沈 国威・内田 慶市 編
2014年7月1日発行
338ページ



近代日本の中国・
台湾汽船「航路案内」
—船舶データベースの一端—

松浦 章 著
2015年2月4日発行
231ページ



語言自邇集の研究

内田 慶市・氷野 歩・宋 桔 編著
2015年2月28日発行
1,007ページ



北太平洋航路案内の
アーカイヴズ
—船舶データベースの一端—

松浦 章 著
2015年6月1日発行
328ページ



自筆稿本目録稿 (甲部)

吾妻 重二 編
2012年3月31日発行
35ページ



科研費の取得状況

■ 中谷伸生

「耳鳥齋と江戸時代の戯画・漫画・アニメーションの源流」
2009年度～2011年度／基盤研究(C)／総額 3,510千円
「耳鳥齋の戯画と近代漫画の比較研究
—アニメーションの源流としての江戸時代の戯画—」
2012年度～2014年度／基盤研究(C)／総額 4,290千円

■ 内田慶市

「モリソン『神天聖書』を中心とした漢訳聖書の系譜と
その文体論的研究」
2015年度～2017年度(予定)／基盤研究(C)／総額4,420千円

■ 乾 善彦

「表記体と文体からみた変体漢文と和漢混淆分との連続性の研究」
2012年度～2014年度／基盤研究(C)／総額3,250千円

■ 奥村佳代子

「長崎における唐語テキスト成立過程に関する研究」
2009年度～2010年度／若手研究／総額2,496千円

■ 沈 国威

「現代中国語への道程：語彙二字語化における外部誘因、
特に日本語の影響に関する研究」
2015年度～2017年度(予定)／基盤研究(C)／総額4,160千円
「中国語の近代『国語』への進化に関する総合的研究：
欧化文法と日本語の影響を中心に」
2010年度～2012年度／基盤研究(C)／総額4,160千円

■ 井上克人

「内藤湖南のアジア観の形成と近代日中学术交流」
2011年度～2013年度／基盤研究(B)／総額15,470千円

■ 藤田高夫

「中国古代における軍事費計量化の試み」
2013年度～2015年度／挑戦的萌芽研究／総額1,950千円

■ 陶 徳民

「近代日本におけるリンカーン受容の研究
—新聞雑誌・公文書・伝記・教科書などを素材に」
2015年度～2017年度(予定)／基盤研究(C)／総額4,030千円

■ 二階堂善弘

「情報化時代における中国学次世代研究基盤の確立」
2011年度～2015年度／基盤研究(B)／総額20,150千円

■ 吾妻重二

「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：
書院・私塾教育を中心に」
2009年度～2012年度／基盤研究(A)／総額34,710千円

■ 西本昌弘

「古代難波地域像の再構築—近世絵図資料と中世史料の検討を通して—」
2015年度～2017年度(予定)／基盤研究(C)／総額2,600千円
「新撰年中行事」の基礎的研究—東アジアにおける年中行事・歳時記の受容と変容—
2011年度～2013年度／基盤研究(C)／総額 3,900千円

■ 長谷洋一

「近世仏師事績データベースの構築」
2012年度～2014年度／基盤研究(C)／総額 2,210千円

海外調査の楽しみ

文学部 松浦 章

外国史を研究するものにとり、海外調査の楽しみは、未知の史跡や資料に遭遇することである。2012年12月下旬、たまたま家族に付き添って行ったハワイでのことである。一日暇になり家族と離れて一人でホノルルにあるハワイ州立図書館へ行った。全く準備も無く、図書館で受付の館員にハワイの最も古い新聞を見せて欲しいと頼んだところ、地下の閲覧室を紹介され、その館員に聞くと、収納ボックスから自分で探さないと言われてた。まずアメリカの公共図書館は素性もわからない人間でも簡単に資料を見せてくれることに驚いた。

自由にボックスを探したところ、1856年6月に創刊された“*The Pacific Commercial Advertiser*”が見つかった。そこでマイクロリーダーを借りて、午前中から閉館まで見ていた。

1856年と言えば日本の安政3年、ペリーがアメリカ艦隊を引き連れ浦賀に現れた時から程遠くない時期である。日本語新聞の最古のものは外国語新聞の抄訳を掲載した1860年代以降のものである(尾佐竹猛編『幕末明治新聞全集』1、大誠堂、1924年)。中国では清朝の咸豊6年に当たる。有名な上海の『申報』が刊行されるのが1872年であるから、この“*The Pacific Commercial Advertiser*”は、かなり早いものと言える。それを午前中から閉館まで、途中で家族が用意してくれたサンドイッチと飲料を食するために館外へ出た以外は、休憩も無くマイクロリーダーの前に座っていた。幸いにクリスマス前であまり利用者がいなかったためか、館員から苦情も言われることなくほぼ一日独占していた。

翌日から休館になるため閉館直前にクリスマスソングが流れてきたのが印象的であった。この時の調査は『或問』第23号(2013年3月)に掲載して頂いた。一日の調査ではあったが新しい研究の世界が広がった。



ハワイ州立図書館



“The Pacific Commercial Advertiser” 1856年7月2日創刊号

海外調査の状況

外国語学部 内田 慶市

これまで中国以外での図書館を中心とする文献資料調査として訪れた国は、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、サンクトペテルブルグ、スペイン、ポルトガル、アメリカなどであるが、とりわけ、この10年は毎年夏はローマを中心に調査を行っている。

今回は特に2013年度の夏期休暇(約2ヶ月)期間におけるロシア、ドイツ、イタリア各国での資料収集の報告を行うこととする。

(1) サンクトペテルブルク・ロシア東方文献研究所

漢訳聖書の研究は、ここ数年、新しい段階に入っているが、それは主に2つの漢訳聖書の発見によるものである。1つは、モリソンの『神天聖書』が元にしたジャン・バセ(Jean Basset)の漢訳新約聖書の発見。特に、ケンブリッジ大学図書館と筆者もその現物を見た、ローマ・カサナテンセ図書館での稿本はこれまでほとんど取り上げられることのなかったものである。もう1つは、それがかつて存在していたことは分かっていたが、ずっと誰の目にも触れてこなかった賀清泰(Poirot)の手になる漢訳聖書『古新聖經』の発見である。それは上海徐家匯藏書楼に残されていたものであるが、実はその満漢合璧本がこのサンクトペテルブルクのロシア東方文献研究所には収められている。これを実際に目にしたものは最近では筆者が初めてかも知れない。

この他にこれまでほとんど取り上げてこれなかった資料として、『神經撮節』(Printed at Serampore by the English Missionarys.)や『舊遺詔書 摩西五經 創始傳 出麥西國傳 利未書 戸口冊記 復傳律例書』(1846=いわゆる分合活字の使われたもの、寧波華花聖經書房刊)、『官語詳解』(雍正7年秋新鐫)、『官音便覽』(同治甲子春重刊)などがある。

(2) ドイツ・Wolfenbüttel 図書館

ドイツのWolfenbüttel Herzog August Bibliothekも欧米人の中国語資料と言う点では極めて重要である。この図書館はドイツでも最も古い図書館の一つであり、数学者・哲学者のライプニッツもかつて館長を務めていたことがあり、彼の集めた中国書コレクションもある。

ここで面白い資料は「佛郎机化人話簿」、つまり漢葡対訳語彙表(ポルトガル語は漢字で表記される)であり、ピジン研究の資料となる。

(3) ローマ国立図書館

ここはすでに10年間毎年訪れており、ほとんど見尽くしたと思っていたが、マニユクリプト目録からこれまで未見のものも数多くあることがわかった。たとえば、『Dizionario cinese portoglese (漢葡字典)』は恐らくはFrancisco Diazの手になるものと思われるが、これまでほとんど言及されていないものである。「Dizionario cinese-inglese (漢英字典)」も興味深い資料である。この他、手書きの中国語学習ノート類も数多く残されていて、まだまだ見るべきモノがここにはあると感じている。



ローマ・カサナテンセ図書館

(4) ローマ・カサナテンセ図書館

ここも毎年夏には必ず訪れるところだが、毎回新しい発見がある。前述のバセの漢訳聖書はここにあるが、実はバセの「ドチリナ」(=『天主聖教要理問答』)もここには収められている。ただ、多くの他の資料と一緒に洋装本で綴じられており、たまたま別の資料を調べていて発見したものである。同じような形で、雍正帝のキリスト教徒や、スヌー一族、サスへ、アキナといった自分の兄弟への迫害に関する在华宣教師からローマ法王への文書なども偶然見つけているし、Premareの漢拉対照の「心字深義」などもこれまで全く言及されてこなかった資料である。

以上の他、ナポリ中華学院(現在のナポリ東洋大学)は、イエズス会宣教師マテオ・リッパによって1732年に創設された欧州最古の東洋学の教育機関であるが、その図書館にも言語接触に関わる数多くの資料が収められている。

いずれにせよ、個人が見れる資料は限られているが、それでも、毎年、こつこつ現地に足を運び、丁寧に目録をくついでいくことで新しい発見があるのであり、これこそ研究者の醍醐味だと思っている。



「ドチリナ」(=「天主聖教要理問答」)

編 | 集 | 後 | 記

「関西大学文化交渉学ニューズレター」が創刊されました。創刊号では、皆様に本学の「文化交渉学」をご紹介します。これまでの活動を振り返りました。今後は年に1回発行し、文化交渉学研究拠点としての活動報告や情報発信をまいります。どうぞよろしくお願いたします。(編集者)

表紙右上掲載写真:

【左上】第7回東アジア文化交渉学会メイン会場(神奈川県開成町)。

【右上】ローマ・カサナテンセ図書館所蔵キリスト関連文献。

【右下】第7回東アジア文化交渉学会にて、大脇良夫氏(全国禹王の碑探求家、足柄の歴史再発見クラブ顧問)より、本学で教鞭を執られた増田渉先生から大脇氏のご尊父に贈られた署名本『中国小説史略』(魯迅著、増田渉訳)が、関西大学図書館に寄贈されました。

【左下】東アジア宗教儀礼研究班が調査に訪れた径山万寿禅寺。



発行：関西大学文化交渉学研究拠点

(Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL: 06-6368-0653 FAX: 06-6339-7721

E-mail: touzaiken@ml.kandai.jp

URL <http://www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/>

発行日：2015年(平成27年)9月